肥後大津駅に電車が来るということ

JR豊肥本線電化10周年

大津町が発展したことの要因の一つに公共交通の利便性がある。その中でもJR豊肥本線の存在は、私たちの生活に大きく影響しているのではないだろうか。

10年前の平成11年10月、豊肥本線の熊本～肥後大津間が電化された。熊本市や大津町を含む熊本都市圏内での交通需要の増大に対応することを目的とした電化はこの10年で大津町に何をもたらし、何の課題を残したのだろうか。

導入の経緯

10年前に、肥後大津駅まで電化を行った理由は、伸びゆく熊本都市圏内の輸送についてどう対処していくかという課題があったからです。人口の伸びとともに求められる輸送効率の向上を、電化によって解決しようということになりました。電化にすることで速度も速くなり、本数も増やせます。国や県、そして沿線の市町の力もあり電化を開始することができました。

電化の利点と変化

気動車（※）と違って、電車はエネルギー効率が良いんです。しかも、輸送の加減速も速く、100㎞に到達するまでの時間が全然違うんです。駅の区間はおよそ2㎞くらいですので、早くスピードを上げて早くスピードを落とすことが大切なのです。また坂を登る力も強くなり、移動時間も早くなります。それが大きなメリットですね。あとは、排気ガスを出さないので環境にやさしいこともあげられます。加減速性能が良いことで、便数も多くなり、電化は通勤や通学にも適しています。

豊肥本線の1日あたりの乗降人員は、電化前は20，800人、そして電化後は27，700人です。10年で約30％増加しているんですね。便数も76本から104本に増加しています。沿線上の人口も1割強増加していると思います。沿線の自治体、特に大津町と菊陽町は人口が増加していますが、交通アクセスの良さも人口増加の要因の一つであると思っています。

今後の豊肥本線、肥後大津駅

豊肥本線は、熊本都市圏の通勤や通学する人たちだけではなく、阿蘇などに観光に行く人たちの輸送も担っています。その他には、駅からの二次交通（バスや自転車など）の問題や駅のバリアフリー化なども検討しています。また豊肥本線は道路沿いにあるので特に踏切の安全化について考えています。

大津町は住みやすいし、良い町だと思います。今後も人口が増えると思っていますので、肥後大津駅が核の一つになるであろうと思います。駅をまちづくりのなかでどう生かしていくのかということを考えてもらって、住民と行政が一体となって、豊肥本線をこれからも盛り上げてもらえればありがたいですね。

九州旅客鉄道株式会社
取締役熊本支社長
古賀徹志さん

大正3年に開設された肥後大津駅は、1世紀近くの間、人々の生活に貢献してきた。開設時には、当時困難だったからいもの輸送などにも活躍したという。

電化されて、熊本都市圏間をより快適に行き交うことができる電車と駅は、大津町が誇れるものの一つである。

※気動車
熱機関を動力源にして自走する鉄道車両のこと。日本では「ディーゼル動車」や「汽車」などと呼ぶことが多い。

20年続いた「からいもフェスティバル」

それはからいもを使った“まちおこし”だった

20周年記念式典で改めて分かったことが、からいもフェスティバルは大津町に大きな影響を与え続けたということだ。「からいも」にはその力があったし、大津の先人たちがそれを築き上げてきた。からいもフェスティバルが開催された平成元年から平成20年までの大津町を見てみると、人口も安定して増加し、ほぼ毎年、社会増（転入などによる増加）が自然増（出生などによる増加）を上回っている。その他にも多数の企業の進出があるなど、町はこの20年で輝いた。

その他の要因もあるが、「からいも」で町を興したことは、まぎれもない事実だろう。

「からいも」はまちおこしを行うための一つの素材…「マテリアル」だった。

からいもフェスティバルが20周年を迎え、「からいも」を使ったまちおこしは新たなステップに進むだろう。

これからの新しいまちおこしに必要なマテリアルは何か。

今後も大津町を良くするために、私たちはそれを探さなければならない。

昨年から始まった「大津まちおこし大学」がある。なぜ「まちづくり」ではなく「まちおこし」なのか。大津まちおこし大学運営委員会の畑中委員長に話を聞いた。

まちおこしとまちづくりの違い

「まちおこし」と「まちづくり」の違いは、大きな意味ではあまり変わりませんが、「まちおこし」とは、特に人が入って動くイメージがあるんです。地域活性化の意味を持ち、住民団体など地域に住む人々の主体性を強調しています。

大津まちおこし大学の名称を決める際に「『まちおこし』という言葉には、住民が動いていくというイメージがあります。これからは住民参画の時代ですので『まちおこし』と名付けましょう」と意見があり、この名前に決定したんです。つまり、まちおこしという言葉は、人や団体が動いて活動することをまちづくりという言葉より強調していることになります。

今後のまちおこしの方向は

今、イタリアから「チッタスロー」というまちづくりの考え方が浸透し始めているんです。チッタとは「まち」のこと、「スローフード」ならぬ「スローシティ」という考え方で「適度な大きさの町」のまちづくりを目指すものです。真の豊かさを考えるまちづくりでも町独自の特徴が必要です。それが「地域らしさ」ということではないでしょうか？何を残して何を作るのかは「大津町らしさとは何なのか？」ということを考えることで分かってくるでしょう。それによって今後の町の発展に統一感がでてくると思います。

大津まちおこし大学は、「人づくりはまちづくり」の精神で活動している。人や団体が育つことは、町も育つのだ。学科生の町を愛する気持ちは強い。「人」や「団体」もまちおこしにおいてのマテリアルの一つなのだろう。

大津まちおこし大学運営委員会　委員長
熊本大学　畑中　寛さん